第６類

「立体紙芝居」の製作と発表

辻本　恵

TSUJIMOTO Megumi

本学の「こどもと造形Ⅰ」「こどもと造形Ⅱ」の授業で取り組んでいる「立体紙芝居」の製作は本学独自の手作り教材の作成として長年にわたって実施されてきた。これまでの記録から見るとその内容は時代によってさまざまに変化しているが指導方法は年月の中でそぎ落とされ追加され検討されてきたことにより築きあげられてきたものと考えられる。その指導の中で学生は自らの保育観に基づいて思い思いの作品を創り上げていく。

本稿では 2024 年度前期に実施した「こどもと造形Ⅰ」「こどもと造形Ⅱ」の授業で取り組んできた「立体紙芝居」の製作と、2022 年度より新たに取り入れた本学付属園での zoom による発表について、その授業内容を報告するとともに、学生作品について紹介したい。

キーワード：手作り教材、立体紙芝居、発表、保育力

1.　はじめに

「立体紙芝居」の製作の内容は「図工演習」で長らく取り入れられてきた。残されている記録を見ると昭和63年に第9回の「立体紙芝居」作品展が開催されている。2023年度より「図工演習」から「こどもと造形Ⅰ」「こどもと造形Ⅱ」へと授業名を変え引き継がれる形となったが本年度で37年以上の歴史を刻んでいることになる。

「こどもと造形Ⅰ」「こどもと造形Ⅱ」は週に1コマずつ行われる。「立体紙芝居」のボリュームからこれらを同シラバスとし週2コマを製作に充てている。

「こどもと造形Ⅰ」「こどもと造形Ⅱ」は保育士資格取得必修科目である。「図工演習」がそうであったように、学生はまず同じく保育士資格取得必修科目である「保育内容・造形表現Ⅰ」（2024年度入学生より科目名が「保育内容・造形表現の指導法」に改められた）を受講し、造形の技法や様々な素材に触れる。「立体紙芝居」の製作目的の1つは以下の通りである。（付録に配布資料を掲載）

＊これまでの授業を通して学んできた技法や素材の扱い方を活かして、総合的な作品としての「立体紙芝居」を製作する。

学生は「保育内容・造形表現Ⅰ」で保育士に必要とされる造形の基礎的な表現技術を身につけ「立体紙芝居」に取り組むこととなる。

「立体紙芝居」のもう1つの目的は

＊手作りの教材として実習等、教育現場や保育現場で役立てる。

である。

この目的を達成するために本学付属園にお願いし、発表をオンタイムで鑑賞していただくこととした。

この方法はコロナ禍の中で発表をオンラインで行ったことがきっかけであった。学生とともに鑑賞してくれた子どもの反応に学生たちの目の色が変わったことを記憶している。オンラインであっても「立体紙芝居」を子どもたちの前で発表することは保育力の向上につながると考える。

さらに子どもたちが実際に自分の作成した「立体紙芝居」を鑑賞するのだという緊張感が、学生のモチベーションを維持することを期待した。

紙芝居は「幼い子どもにとって楽しめる伝達手段であり同時に知る喜びや知的好奇心を育む」とされている。また「子どもたちの豊かな人間性を培う」[1)] として期待される児童文化財でもある。長年紙芝居の製作が授業内

容として取り入れられてきたのはこのような児童文化財を身につけた知識や技術を使って手作り教材に仕上げるという継続性を持った授業展開が1つの理由であっただろう。さらに学生一人一人が表現を高め、楽しむ過程を大切にしながら自分自身の感性を磨いていくプロセスの一つとして紙芝居に「立体」という他にはない本学独自の表現を生み出したと考える。

今回は「立体紙芝居」の製作に加え、発表と事後に行ったアンケートを振り返り、どのような学びを得たのか授業実践報告をしてみたい。

2. 授業内容

1）製作

「立体紙芝居」の製作は前述の通り「＊手作りの教材として実習等、教育現場や保育現場で役立てる。」が目的の一つである。保育の現場で役立つ手作り教材として造形の授業で取り入れられたものと思われる。

「立体紙芝居」の製作条件として以下があげられる。

＊対象年齢：3〜5歳を基準とする

＊枚数：10枚程度を基準とする。

＊大きさ：四つ切（B3）

＊ストーリー：オリジナルのもの、または著作権による制限のないもの。

＊その他：既成の紙芝居にはない工夫を取り入れる。（動く部分や仕掛けなど）

これらは製作時の目安として学生に提示するものであり、例えば乳児用に製作したいという学生がいれば指導やアドバイスもそれに応じるようにしている。

枚数に関しては「何枚以上ならよいか」という質問が学生からよくあがる。お話があっという間に終わってしまったり長すぎたりするストーリーでは子どもたちは紙芝居を楽しむことができない。見る側、楽しむ側の立場に身を置いてみることで自分の「立体紙芝居」に合った枚数が決まってくる。紙芝居の内容、製作計画とともに学生自身で枚数は決定していくがおおよそ8枚〜12枚となる。

学生がなぜ枚数にこだわるのかというと「立体紙芝居」の特徴でもあるその大きさにあると思われる。1枚が四つ切サイズなので市販されている紙芝居よりも倍近く大きい。またその一枚一枚に仕掛けを施すとなると完成できるのかどうか不安になることもあるかもしれない。そのため仕掛けについては最もシンプルな仕掛けの二種類を授業の初期段階で学生全員が試作する時間を設けている。試作することによって思っていたより簡単にできると学生自身が感じることができ、提案した仕掛け以外にもチャレンジするきっかけとなると考えている。

製作過程は

1. 登場人物（動物など）を作成する
2. 背景を作成する。
3. 背景の上に1で作った登場人物を配置し、動くようにする。（1枚目の完成）
4. 同様にして2枚目3枚目を完成させる。
5. 完成した3枚を自由に組み合わせてストーリーを完成し、プロットを描く。
6. プロットに従って残りの枚数を完成させる。

が方法としてあげられる。ストーリーを考え過ぎるがあまり時間に余裕がなくなる学生や、造形への苦手意識から製作が進まない学生への対応としてこの方法が定着したものと思われる。しかしこの方法も強制ではない。例えばストーリーを作ってから製作に進むという学生もいる。自主性が製作のモチベーションを維持することにもつながると考え、学生一人一人に合った方法を自分自身で選択するよう促している。

学生一人一人のよさを発揮し、自分なりの「立体紙芝居」を完成させるには多様な表現があることを理解する必要がある。そのため初回授業には先輩の「立体紙芝居」を鑑賞する時間を設けている。先輩の作品を鑑賞することで「立体紙芝居」がどのようなものなのかを知り、自分の製作計画を立てる一助とする。以前は実際に授業時に学生に演じてもらっていたが、時間割の都合や授業参加の公平さから現在は教員が作品を紹介したり、可能であれば先輩が演じているビデオを鑑賞したりする。

学生の製作に対する得意不得意は三者三様である。そのため鑑賞する「立体紙芝居」は仕掛けに尽力したもの、ストーリーが特徴的なもの、得意な絵を活かしたものなどさまざまな表現の「立体紙芝居」をとりあげるようにしている。登場する人形の素材や形もいろいろなものをとりあげて自分の表現の参考にできるようにしている。描くことが苦手だと感じる学生には人や動物を描かない方法を提示することもある。

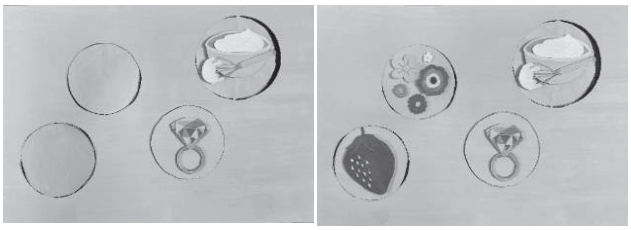
さらに使用する材料・用具・技法についてはどのようなものを用いてもよく、ブリキ、トタンなど普段の造形の授業時でも扱うことのないようなものも参考に提案している。

先輩の「立体紙芝居」の鑑賞と材料・用具・技法についての確認、仕掛けづくりの体験をしたのち学生は各自

のねらいや目的に合わせたそれぞれの「立体紙芝居」に取り組んでいく。学生はそのものの感じを伝えるための様々な材料を吟味し、「保育内容・造形表現Ⅰ」で体験した技法などを使ってそれぞれの場面の雰囲気に最もふさわしいと思われる表現を工夫していく。ここからは製作する内容や仕掛けの方法も学生によって変わってくるので一斉授業ではなくほとんど個別指導となる。各々の学生に応じたアドバイスやヒントを与え、励ますよう心掛けているが、学生同士での意見交換や互いに教えあう姿も見受けられ、学生たちの学習意欲の高まりを感じる。

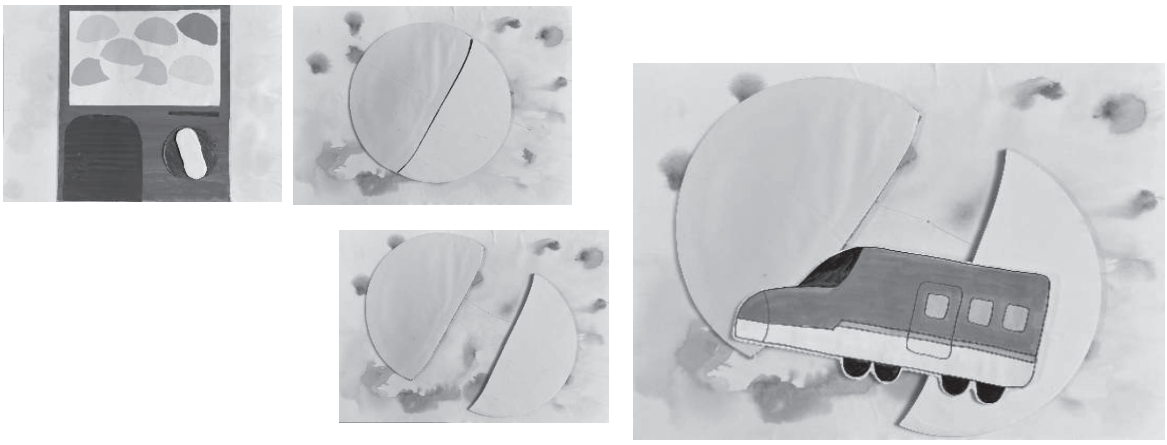
以下に学生たちの作品を紹介する。

洗濯機には洗濯物が入っています。

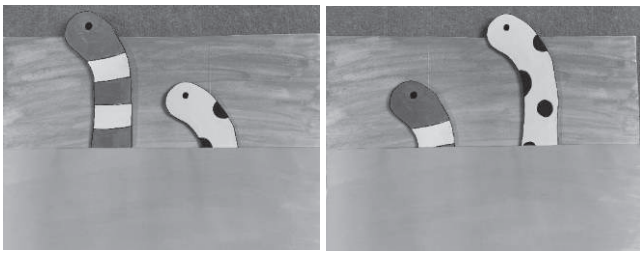


くるりと回すとイチゴやお花が出てきます。

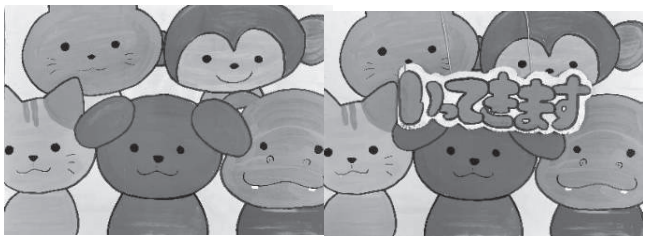
フェルトや布で柔らかな質感を出しています。



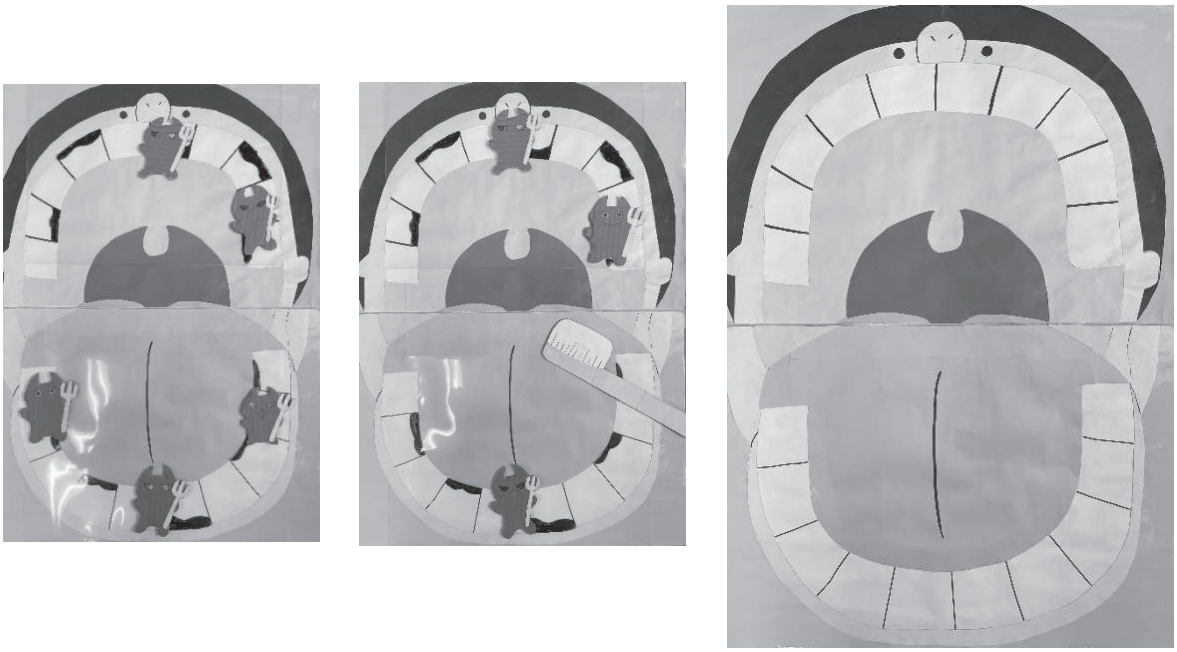
ガチャポンのダイヤルを回すとカプセルが飛び出します。カプセルからはプラモデルが出てきました。



ちんあなごのかくれんぼ。



「いってきます」の文字が後ろから飛び出します。



大きなお口を歯磨きでゴシゴシ。するとお口の中はピッカピカ。

電車が到着。扉が開くと...

2）発表

「立体紙芝居」は観客（子ども）の前で演じることを目標としているのですべての場面が完成した後に発表の練習を行う。一クラスの人数は30名程度なので1時間程度を1回の発表時間と考え授業時間の30回のうち2回を発表に充てており、発表練習のための時間として1回を割り当てている。ロールプレイを繰り返し行うことで発表への期待が高まってくる様子がうかがえる。

発表は各グループで子どもたちへの言葉かけを考えるなど、始まりと終わりをわかりやすくするように心がけ、

大きな声でゆっくりと、表情豊かに読むよう指導している。登場人物の特徴を捉えて声色を変えたり、子どもたちの反応を汲み取って即興で答えたりすることも必要である。画面の向こうにいる子どもたちは画面を見ているのでビデオと勘違いすることもある。zoomとはいえオンタイムで行っている発表であるからこそ子どもの反応が即座に伝わってくるのだから保育者としてアドリブを入れるくらいの余裕を持てるように自分の「立体紙芝居」を理解する必要があるだろう。十分な時間を確保したいがやはり造形の授業である以上製作に時間をかけるのは否めない。

発表練習の時間では友だち同士で声の出し方や場面のめくり方、仕掛けの動かし方などのアドバイスをしあう学生がいる一方で製作に時間がかかってしまい十分に演じる練習ができない学生もいるので、製作の段階でこの場面はどのように表現するのかなど教員から声掛けし、場面ごとに発表時を予想してストーリーの進め方、次ページへの移動や仕掛けを動かすタイミングなどをアドバイスするようにしている。

2024年度の発表は筆者の担当2クラスの学生を対象に以下のとおりzoomにて行った。

於：神戸教育短期大学付属
　　八尾ソレイユ認定こども園

各グループ10～15分程度　4名もしくは3名の発表
3Cクラス　27名
2024年7月22日（月）13名発表
　　7月25日（木）14名発表
2Aクラス　30名
2024年7月23日（火）16名発表
　　7月25日（木）14名発表
合計57名

3.　振り返りアンケート

対象学生57名に製作・発表の効果を図るため発表後に振り返りアンケートとして次のような記述を求めた。

・製作・発表を振り返って、どのような学びがありましたか。製作と発表に分けて記入してください。（自由記述）

以下に製作、発表に分けて振り返りを集約する。なお、対象者には予めアンケートの趣旨を詳細に説明し、書面にて同意を得た。

製作に関して

大きく①子どもについて②仕掛けについて③素材・画材について④友達との協力について⑤その他にわけられた。

① 子どもについて
・どうすれば面白い、楽しいと思ってもらえるか、子ども目線で考えることが大切である。
・仕掛けや立体表現は子どもたちのワクワクを引き出す。
・作っていくうちにずっと子どもたちのことを考えて作っていると気づいた。

② 仕掛けについて
・思ったより簡単で楽しく作ることができた。
・何度も仕掛けを作ることで早くうまくできるようになった。
・仕掛けが面白かった。
・驚きや感動があった。
・身近なもので仕掛けを作ることができる。
・人形は大きい方が動きがわかりやすい。

③ 素材・画材について
・画材を組み合わせて描くことで表現の幅が広がった。
・素材の質感や手触りを大切にすることで使い方や可能性について考えられた。
・いろいろな素材を使う工夫を学んだ。
・構図や背景を工夫することで物語がより魅力的になる。

④ 友達との協力について
・友達と材料を共有したり意見を出したり聞いたりすることでよりよくすることができた。

⑤ その他
・楽しさと達成感を味わうことができた。
・自分の思いが詰まった愛情いっぱいの手作り教材を見せることも保育者として必要だ。
・作る人が楽しみながら取り組むことで様々なアイデアが生まれる。
・作る側、鑑賞する側の両方の目線で制作した。

発表に関して

・練習がもっと必要だった。
・リモートだったこともあってタイムラグがあった。

・子どもたちの反応が分かりづらかった。
・仕掛けを動かしながら物語を進めていくのが難しい。
・子どもと目線を合わせながらゆっくり読んでいる発表者、紙芝居に興味を示し反応していた。
・ゆっくり見せる、ゆっくり話すことの大切さ。簡潔でわかりやすい言葉を選ぶ。
・他の人の作り方が面白く、作品を鑑賞するのもためになった。
・子どもが楽しく見てくれたのでやってよかったとやりがいを感じた。
・問いかけや声掛けがあると子どもたちをひきつけお話に入っていきやすい。
・読むときの一つ一つの行動が物語の一部になるということを感じながら発表することが子どもたちにとっても楽しい読み聞かせになる。

4. まとめ

振り返りアンケートの「画材を組み合わせて描く」「素材の質感や手触りを大切にする」「いろいろな素材を使う工夫」という記述からは、総合的な作品としての「立体紙芝居」を製作するという目的を達成していると考えられる。

また保育士間の連携・協働やコミュニケーションは欠かせないものと言われる。友達との協力に関しての記述は保育士同士の関係性を構築する心もちを育む一手となり得ることを示唆している。

しかし発表に関しては今後の検討を要する。

くじでのグループ分けであったことから発表内容が似通ったものが続くことがあった。このため教員が各学生の作品内容を把握してグループ分けを行うほうが良いであろう。

立体紙芝居は3～5歳を対象として製作したものであったが鑑賞する子どもが2歳児の時もあり内容の理解が難しかったのではないかと推察する場面もあった。どの時間帯に何歳児が鑑賞するのかなど付属園とのより綿密な打ち合わせが必要である。また付属園では先生方も発表を鑑賞しているため作品や発表に関するアンケートを実施し、学生へのフィードバックを行うなど発表内容や発表方法についての考察が求められる。

現行の授業内容では紙芝居の製作でほぼ授業時間を使うので発表のための準備がおろそかになりがちである。目的を「＊手作りの教材として実習等、教育現場や保育現場で役立てる。」とするのであれば紙芝居の演じ方の指導も要される。下読みの重要性、紙芝居の抜き方、仕掛けの動かし方、セリフの読み方に十分な指導時間を設ける必要があろう。

Zoomによる発表であったことから必然とタイムラグが発生し、子どもたちの反応がタイムリーに届かなかった。この点に関してはクリアな音声、仕掛けがはっきりと見える画質の確保など技術的、機器的な向上も望まれる。それに加え立体紙芝居の特徴である立体であることや動きのある仕掛けを最大限に活かすならやはり対面での視聴の機会を設けることが効果的な提案になると考えられる。

以上、教員による検討や改善は今後取り組むべき課題であるが、学生はこの「立体紙芝居」の製作と発表を通して教材を作りあげた満足感だけでなく、子どもとのかかわり方や手作り教材を通したコミュニケーション力が少なからず身についたのではないかと思う。今後も「立体紙芝居」の製作・発表を継続し、本学独自の方法論が確立され学生の保育力を伸ばす一端を担うことを願う。

5. 引用文献

1）清水　美智子（2007）紙芝居「演じることと語ること」―紙芝居のもつ特徴と効果を探る―
名古屋柳城短期大学研究紀要第29号　p47

6. 参考文献

小林　伸雄（2017）「立体紙芝居」の制作
夙川学院短期大学　教育実践研究紀要　第10号

平田　智久　小林　紀子　砂上　史子（2015）最新保育講座⑪保育内容「表現」
ミネルヴァ書房

浅井　拓久也・浅井　かおり（2018）紙芝居に対する保育士の学びと活用の関係に関する研究―どのような学びが紙芝居の活用につながるか―
未来の保育と教育―東京未来大学保育・教職センター紀要第5号

永井　久美子（2021）保育士間の連携・協働に関する研究動向―乳児保育における保育士間のコミュニケーションに焦点をあてて―
大阪保育大学紀要第16号

7.　付録

立体紙芝居の製作

1．目的

＊これまでの授業を通して学んできた技法や素材の扱い方を活かして、総合的な作品としての立体紙芝居を製作する。
＊手作りの教材として実習等、教育現場や保育現場で役立てる。

2．条件

＊対象年齢：3～5歳を基準とする。
＊枚数：10枚程度を基準とする。
＊大きさ：四つ切り（B3）。
＊絵：オリジナルのものとする。
＊ストーリー：オリジナルのもの、または著作権による制限のないもの。
＊その他：規制の紙芝居にはない工夫を取り入れる。（動く部分や仕掛けなど）

3．製作過程

1．オリジナルの登場人物（動物など）を作成する。（動く部分などを考慮して）
2．背景を作成する。（ある程度ストーリーを考慮して）
3．背景の上に1で作った登場人物（動物など）を配置し、動くようにする。（1枚目の完成）
4．同様にして2枚目3枚目を完成させる。（ストーリーを考慮して）
5．完成した3枚を自由に組み合わせてストーリーを完成し、プロットを描く。（枚数決定）
6．プロットに従って残りの枚数を完成させる。

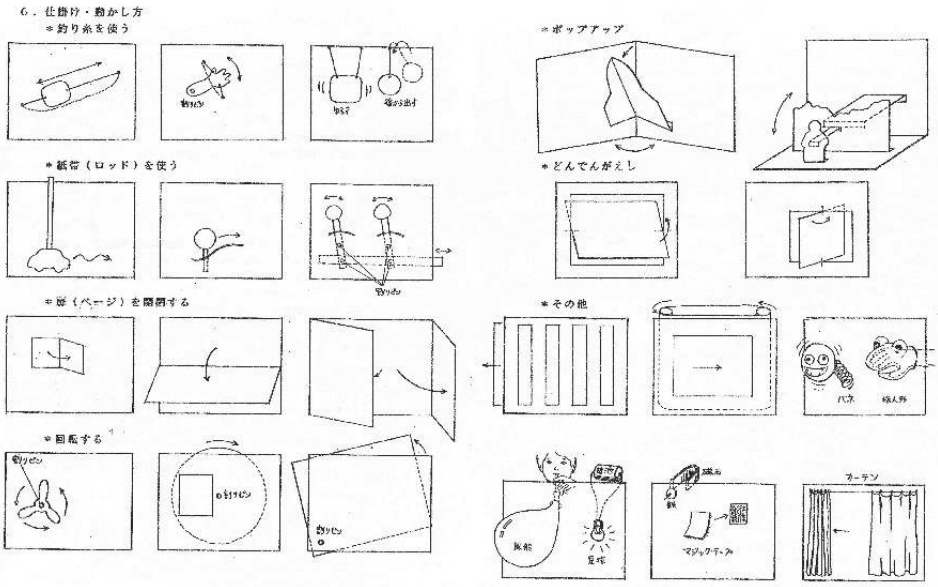
4．製作上の留意事項

＊自分の教育観、保育観に合わせる。
＊使用の目的や意味を考慮する。
＊使用する時期を考慮する。（季節感など）
＊場面展開をはっきりさせ、構図に変化を持たせる。
＊あまり細かい部分にこだわりすぎず、遠くからもよく見えるように、人物などは大きめに配置する。
＊ストーリーが長すぎたり、短すぎたりしない。また、難しすぎたり、簡単すぎたりしない。
＊あまり教訓的すぎるものより、子どもたちがワクワク・ドキドキしたり、楽しんだり、感動できるもの。

5．材料・用具・技法

＊どのような材料・用具・技法を用いてもよいが、そのものの感じや場面の雰囲気を表現するのに最もふさわしいと思われるものを工夫して使用すること。以下にその一例を掲げるので参考にしてほしい。

＊材料
・画材類：水彩絵の具、ポスターカラー、墨汁、インク、コンテ、パス、ラッカー、ニス、水性塗料、マーカー、サインペン、鉛筆、色鉛筆、その他
・紙類：画用紙、色画用紙、ケント紙、トレーシングペーパー、ボール紙、和紙、包装紙、セロファン紙、新聞紙、段ボール、紙ひも、その他
・布類：洋服地、和服地、白布、綿ジャージー、タオル地、ガーゼ、ベッチン、コールテン、サテン地、ビニールクロス、ボア、皮革、毛皮、その他
・木材類：板材、角材、丸棒、ベニヤ板、バルサ材、竹、コルク、その他
・金属類：ブリキ、トタン、アルミ、針金、ピアノ線、金網、ねじ、ばね、ビス、ナット、金具類、空き缶、電化製品や時計などの部品、その他
・プラスチック類：空き容器、発泡スチロール、その他
・日用品・家庭用品類：割り箸、つまようじ、アルミフォイル、ポリ袋、キッチンテープ、紙筒、スポンジ、ナイロンたわし、マジックテープ、ひも類、各種容器類、その他
・廃品・廃材類
・自然物：石、砂、木、木の葉、木の実、樹皮、羽、ワラ、その他
・その他：糸、釣り糸、粘土、手芸用品、ガラス

＊用具
・筆、ハケ、歯ブラシ、金網、ペン、ローラー
・はさみ、カッターナイフ、円切りカッター、彫刻刀、キリ、目打ち、コンパス、ピンセット、ヤスリ、のこぎり、糸鋸
・接着剤：木工用ボンド、ゴム皮革用ボンド、エポキシ系接着剤、その他
・ハトメ、割りピン、ホッチキス

＊技法
・絵画技法各種、紙の造形、版画
・コラージュ、砂絵、切り絵、押し絵、貼り絵、モザイク
・木などを彫る、粘土細工、ぬいぐるみ、パッチワーク
・ペープサート、起こし絵、巻物、エプロンシアター
・その他各自の工夫次第で様々な技法が考えられる。また、あまり一般的ではない自分独自の技法などを使っても良い。